

080119 里としての海について考えるシンポジウム

13:00~16:00

虎ノ門パストラル・新館5F ミモザ

主催：全国漁業協同組合連合会

共催：海と魚と食を考える会

中島によるテープ起こし原稿—その3

【未定稿：主催者及びおもな発言者の確認はしていますが、参加者全員の確認を得ていませんので複写転送等の利用は禁止します。また、公開に一人でも異議を唱える方がでてくれば、ファイルを削除します。文責は中島です。】

パネルディスカッション

「里海から、里海へ—自然・ひと・協同を考える」

パネリスト

松田 治 (広島大学 名誉教授)

加瀬 和俊 (東京大学社会科学研究所 教授)

金萬 智男 (NPO 法人 盤州里海の会 理事長)

足利由紀子 (NPO 法人 水辺に遊ぶ会 理事長)

乾 政秀 (株式会社水土舎 代表取締役)

○コーディネーター 市村隆紀 (JF 全漁連 漁政・国際部長)

テープ3始まり。

はじめに

○コーディネーター (司会) 市村 それでは、「里海から里海へ—自然・ひと・協同を考える」というテーマで、パネルディスカッションを進めさせていただきたいと思います。私は本日のコーディネーター役、進行役をつとめさせていただく全漁連の市村と申します。よろしくお願いいたします。

里海につきましては、ただいま、内山先生から「里山よりも里海のほうがいいよ」と、背中をだいぶ押しいただきましたので、少し元気が出てまいりました。里海ということばはまだまだ定着をしていないということがいわれておりますが、「里海というのはなんだろう」ということを考えたときに、それは、「漁村だよ」と、空間のことをいったり、里海とは「海の環境のことだよ」ということで、自然の環境で捉えるかたもいらっしゃいます。また、「里海を担う中心的なひとはだれなの」ということで、その役割を考えるかたもいらっしゃいます。

本日はここにありますように、最後は、「協同」(きょうどう)、協同というのは「共に働く」という意味のことばでもあるとおもいます。本日お見えのかたは、いろいろなたちば、いろいろな経験をつまれたかた、たくさんいらっしゃるわけでございますけれど、里海という思い、里海という言葉について、皆様の気持ちが少しでもひとつになれるようなパネルディスカッションになれよいなあと願っておるところです。そのような意味でも、ぜひ参加の皆さんの積極的なご発言なり、ご意見をいただきますように、後ほど時間を設けますので、ご協力をお願い申し上げます。

本日の進め方ですが、私のほうから、最初に、パネラーの方をご紹介します、最初に2、3分、そのかたがどういった方であるのか、という自己紹介をしていただきます。そのあと、約5分程度、里海への思いをそれぞれのかたがたからお話いただきます。そして、私のほうからいくつか質問させていただいて、そのあと皆様に参加をしていただこうと考えております。よろしく願いいたします。

今日は5名のパネラーのかたにお見えいただいております。私の一番遠いほうの、皆様から、正面に向かって右側のかたから、ご紹介をし、自己紹介をお願いいたします。それでは、最初に一番右の肩で

ございますが、広島大学名誉教授で、瀬戸内海研究会議の会長をされておられます松田先生です。松田先生は、瀬戸内海を里海として再生するために、そのことで瀬戸内海全体の漁業者、関係されている方々と力をあわせて取り組んでおられます。松田先生よろしくお願ひいたします。

瀬戸内海を里海に、新たな視点で再生を考えよう

：松田治（広島大学 名誉教授）

【松田】（パネラー） 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました松田でございます。私は、広島大学で瀬戸内海について研究しており、学生と一緒に調べたりしておりましたが、すでにリタイアいたしまして、現在はさまざまな研究グループのお世話などをさせていただいております。その中に、今ご紹介のありました「瀬戸内海研究会議」という会がございます。これは、特定の学問分野とにかかわらず、いろいろなかたがたが、興味があれば加われるというグループでございます。そこで、この4、5年、「里海」に関する議論を進めてまいりました。ちょうど1年ほど前ですが、この「瀬戸内海を里海に一新な視点による再生方策」という本を、瀬戸内海研究会議として出版いたしまして、これと連携して、瀬戸内海知事首長会議や、行政のほうのグループもございます。そういうところで、里海ということ 키워ドにして、いろいろな再生方策を検討しております。具体的な里海作りの取り組みにも、いくつかかわっておりますので、こういったことを紹介させていただきながら、今日お集まりの皆様のご意見を伺わせていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

沿岸の場の使い方の仕組みを考えてみよう

：加瀬和俊・東京大学社会科学研究所教授

○コーディネーター（司会）市村 おとなりは、東京大学社会科学研究所教授、加瀬和俊先生です。加瀬先生は、漁業経済史がご専門ですが、日本の漁業のこれからをどうするのか、ということからいろいろな立場でご研究をされ、ご提言をいただいております。

【加瀬】（パネラー） 加瀬と申します。よろしくお願ひいたします。私は、漁業の経営問題、沿岸漁業の経営問題、後継者の問題といったようなテーマを中心に勉強しておりますけれども、今日はパネリストの皆さんは、それぞれ、現場をお持ちになって、そこで、貴重な実践をされておられるかたばかりです。私も、お話を伺って非常に勉強になる気がいたします。私自身が、そういう、実践、実際の経験というものをもっていないという点で、パネリストとして不適格という感じをしておりますけれども、今日の議論の中では、沿岸の場の使い方についての、むかしからのさまざまな地域で積み重ねられてきた経験とか規則の「動かさう幅」の問題のような問題について考えてみたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

木更津から「里海」を全国に発信しています

：金萬智男・NPO 盤州里海の会理事長

○コーディネーター（司会）市村 ありがとうございます。昨日インターネットで、「里海」と検索しましたら、80万件出ました。「里山」は2200万件あります。その80万件のトップに出てくるのが、金萬智男さんの、NPO 法人盤州里海の会であります。金田漁協の漁師さんでいらっしゃいます。よろしくお願ひいたします。

【金萬】(パネラー) こんにちは。金萬智男と申します。ここに呼ばれたのは単に NPO 法人が「盤州里海の会」という「里海」の名前をつけている、というように思っただけであればよいと思います。高校卒業してから、ずっと海をやっていて、親子代々漁業をやっています。だからあんまりガクがありません。大学の先生方と対等にお話をできるような人間ではないので、ただ「里海」ということばに関して、いわしていただきますと、うちの NPO 法人の活動として、おもしろいことはやっていますので、それは何かあればおいおいお話をいたします。ほんとうになにもできませんですけど、よろしく願いいたします。

干潟を守る活動をして漁師さんの応援しています：足利由紀子 (NPO 法人 水辺に遊ぶ会 理事長)

○コーディネーター (司会) 市村 ありがとうございます。続きまして本日は、大分県の中津からお越しいただきました、NPO 法人水辺に遊ぶ会理事長、足利由紀子さんでいらっしゃいます。よろしく願いいたします。

【足利】(パネラー) こんにちは。中津は、瀬戸内海の西側のほうです。大分県と福岡県のちょうど間ぐらいのところにあります中津市から参りました。「水辺に遊ぶ会」の足利と申します。私たちの住んでいるところは、瀬戸内海で一番大きな干潟があります。中津市だけで、1300ヘクタール。お隣の福岡県豊前市から国東半島のところまで、大体3000ヘクタールの干潟があります。ここでは沿岸漁業がちゃんとされていて、私たちは十年前から、何とかこの干潟を守ろうということで、いろいろな活動をしてきました。活動する中で、やはり干潟で

漁業されている漁師さんと仲良しになって、漁業のことを知らなければいけないなあということで、勝手に、漁師さんの応援団のつもりでいろいろな活動をしています。今日はよろしく願いいたします。

沿岸漁業の再生をはかるための鍵が「里海」：乾 政秀・水士舎代表取締役

○コーディネーター (司会) 市村 ありがとうございます。五番バッターは、乾政秀さんです。乾さんは、漁業や水環境をテーマにコンサルタント活動をされ、また漁業・漁村の多面的機能につきまして、幅広く調査検討にも携わってこられました。よろしく願いいたします。

【乾】(パネラー) ご紹介いただきました乾でございます。私はそろそろ還暦を迎えるわけですが、学校を出てから、前半の18年というのは、漁船に乗って、沿岸域の海洋調査をやっておりました。その後後半の18年というのが、漁村振興の視点から、どちらかというと社会科学的な立場での調査や検討を行って参りました。2001年に「水産基本法」ができるわけですが、農業や林業は、多面的機能というのが明確に法律の中で定められていたんですけども、水産基本法は、多面的機能はあるということを書いてあるんですが、具体的に何なのか、ということがかかれておりませんで、そのことの検討を水産基本法ができた年から、2、3年やりまして、その後現在、漁業者や漁村が、沿岸域でいろいろな環境保全の活動をやっているわけですけども、その実態を、この2、3年調査をさせていただいております。

山形県を除く、全国都道府県を調査して仕事で参りましたが、われわれの学生のころから、水産業は斜陽といわれておりましたけれども、いまからみる

とまだまだ、すばらしい水産業であったとおもいます。この35年の間に、産業としての存在感が大きく薄れつつあるというなかで、きわめて深刻な危機感をもっております。何とか日本の漁業の再生を実現したいということで、今後とも活動を続けてまいりたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○コーディネーター（司会）市村 ありがとうございます。これより本題に入りますが、パネラーの方にご了解いただきたいのですが、教授とか理事長とか肩書きでお呼びしましたが、これからさきは、さん付けでお呼びすることをご了解いただきたいのですがよろしいでしょうか。ありがとうございます。皆さんもご質問される時はさんづけをお願いします。まずさいしょに、皆様の活動されていること、ひごろ考えられていることをつうじて、里海への熱い思いをお話いただければと思います。それでは松田さんからお願いします。

人々と海とのかかわりの中で、豊かな海をとりもどそう―「里海」概念の提案

【松田】（パネラー） さきほど、口火を切らせていただきましたが、瀬戸内海ではこの4、5年、里海に関する議論がだいぶ盛り上がってきております。その話がどうやって出てきたのかということをつくめながら、すこしお話をいたします。瀬戸内海は閉鎖性海域といわれております。そのなかではすこし、環境管理と申しますか、制度上特殊な海です。日本に閉鎖性海域が88あります。瀬戸内海が一番大きいのですが、ここには、瀬戸内海限定バージョンとして、通称「瀬戸内法」といって、「瀬戸内海環境保全特別措置法」という、瀬戸内海だけにかかっている法律があります。「瀬戸内海環境保全臨

時措置法」という名前で1973年（昭和48年）に制定されて、その後改正されて法律の名称が「瀬戸内海環境保全特別措置法」と変更され現在に至っています。制定されてから30数年たっておりまして、その間に日本の社会や世の中もずいぶん変わりました。

「瀬戸内法」ができた35年程前には、瀬戸内海は、「死の海」とよばれておりました。私が広島大学に赴任したのが1971年でしたので、ちょうどそのころからずっと甲乙丙丁戊己庚辛壬癸を持って体験をしてまいりましたが、それこそ、漁師さんが、1升ビンに、赤潮の海水をいれてもってきたりとか、いろいろ公害問題がさかんにさげばれておるときでした。

それで、これはたいへんだというので、いろいろな動きがありました。その当時には珍しい、議員立法という瀬戸内海だけにかかる法律ができたわけです。その骨子の中で、一番重要な点は、流入した有機物、リンや窒素を削減しようということです。特に総量規制という、瀬戸内海に入ってくる全体量をコントロールしよう制度でやってきたわけですが、それがあつた意味では、行政的には成功をしました。瀬戸内海に入ってくる栄養や有機物の量は、年々減りまして、水質的にはかなりきれいになった。

ところが、30数年たってみると、水質はそこそこ回復されたけれども、その間にたくさんの浅場が、藻場や干潟が埋め立てられて、工場の敷地になったり、あるいは赤潮（あかしお）や貧酸水塊（ひんさんすいかい）がしばしばおきるとか、サカナがだんだんとれなくなってきました。しかし、もともと世界の海に比べると瀬戸内海の単位面積あたりの生産量はダントツぐらい、非常に豊かな海なんですね。これにはいくつも理由がありまして、「瀬戸」（せと）という非常に狭くて、潮の流れの速いところがあり、「灘」（なだ）という広いところと、いろいろ

な環境があります。

瀬戸内法も30年たち従来型管理方式の見直しへ

それから、瀬戸が海水を混ぜてくれて、栄養や酸素を供給し続けてくれるとか、いろいろな理由がありますけれども、もともと、非常に豊かな海なのですが、それが衰えてきている。生物の多様性ですとか、漁獲量も少なくなっている。それでは、ただ異質だけを問題にしていたのでは、いけないのではないのか。とくにサカナの産卵場所だったり、育つたりする浅場、藻場干潟の回復を含めて、失われた生息環境、それから、人間とのかかわり、そういったものを取り戻していかなければいけないのではないのか。

そうすると、従来型の管理方式が水質規制を主眼にした、水質がよくなればよいというような対応で30年きたのですが、ちょっとその方式では賞味期限が切れた、ということで、やはり、人々と海とのかかわりの中で、豊かな海をとりもどして行って、その生態系や環境を守りながら、水産物とかレクリエーションとか、さまざまな利用をしていくという、そういうことを「里海」という概念で、われわれは表わしたわけです。

いま「里海」という言葉は、けっこう国際的にも、割合に受けております。国際会議等とか、「里海」(SATOUMI)と紹介しますと、ずいぶん反応があるのですね。わたしどもの仲間であり、会議の副会長をしていただいている、九州大学の柳哲雄先生は、SATOUMIという、英語に訳さずに、日本語のまま「SATOUMI」という本を出されました。わたしども、国際会議でも、SATOUMIとして、そのまま話しているんです。かなり外国人からも反応もよく、TSUNAMI(つなみ:津波)ということばは、日本語ですが国際語になっているように、SATOUMIと

いう言葉も国際的に定着させようと、そんな動きも出てきています。少し反応も出てきているところです。

英語の「SATOUMI」外国でもウケています

さきほどひとつもうしあげましたが、行政のほうも、瀬戸内海の管理体系を抜本的にかえないと、このまま水質はもう少しよくなるかもしれないけれども、あまりおさかなもとれない、海も親しみにくい海になってしまう、ということで、瀬戸内法の全面改訂、いちおう、仮の名前で「瀬戸海再生法」という名前をつけていますが、そういうものに向かって立ち上げようとおもっているところです。これは、また、それなりに盛りあがっております、100万人署名という、ずいぶん大きなことというなあと思ったのですが、現在すでに、141万人の賛同する署名が集まっておりました、これから法律改正になりますと、国会とか議員さんとかとの、いろいろと難しい対応を図っていかなければいけないと思いますが、かなり「里海」をキーワードにした地元の動きが、活発になってきております。

あとは、それぞれの地域で、小さな湾とか、漁業組合をベースにした里海づくりの取り組みも、盛り上がってきているところです。

今日先ほど、基調講演にもありました、森と人ということがありましたが、海についても、ひとと海とのかかわりを、一般の人を含めて、だんだんだんだん薄くなってきていることをとりもどしながら、豊かな、いろいろな生物がいて、利用もできるという、そういう海を作りたいというのが、「里海づくり」という言葉で表現しております。

○コーディネーター(司会)市村 ありがとうございます。それでは加瀬さんお願いいたします。

地先の海と一体化した漁村集落のありかたが「里海」

【加瀬】（パネラー） 私は沿岸漁業の立場から発言をしてみたいと思います。「里海」という言葉を私なりに解釈をいたしますと、「地先の海と一体化した漁村集落のありかた」という風に理解ができるかなあとと思います。

そして、海を介した、人と人との関係というものが、コア（核心：CORE）になって、その人と人との関係が、渦巻状に広がっていくようなそういう世界というものが「里海」という言葉の中にイメージされているのではないか、というふうにおもいます。

漁業経済とか漁業経営というようはなしになりますと、どうしてもカネメの話で表現されるということになりますので、いささかせちがらい次元の問題になるわけですが、海をめぐる人と人との関係のなかで、やはり、海によって生活を成り立たせている、という人々の集団、この人たちの「生活を守る」あるいは「生活を保障する」というものが一方である。しかし同時に、その活動というものが、海をめぐる人と人との関係というものを、その発展を、阻害するような、遮断するようなものである必要はまったくなく、というように思います。

海で暮らす人たちの「生活を守り」「保障する」ことの原因

私は、漁場、海を使う大原則、海で生活を成り立たせるために、またそうするつもりで一生涯をかけようとしているひとたち。その人たちの生活を重視するということを、十分に保障した上で、よりひろく、海をめぐる、人と人との関係というものが、拡大的にひろまっていくようなシステムというものを、十

分に作れるだろうと、そのように思っております。

そのつくりかたというのが、一部の方たち、漁業の経営が難しくなってくるので、この漁業、沿岸漁業がだんだん衰えてしまえば、そこにその他のひとが海を使えるというかたちで、漁業が衰退をしてレジャー産業等が増えてくるというように構想する人たちがいるかもしれません。

あるいは漁業の中に、いまたくさんいる、漁民の人たちが、後継者難の中でへってきて、そこに、他の地域から効率的な経営体が入ることによって、効率のよいところだけを使って、後の海はほかの人がレジャー的に使えるようにするという考えのひともいるかもしれない。

しかし、そうではなくて、やはり、海を生活をかけて、使うというひとたちがいるからこそ、海をめぐるさまざまな環境の保全、あるいは、壁に張ってあるパネルに、第二次の自然という表現がありましたけれども、そういった環境が守られ、ひとを包み込んだ自然の生態系の循環システムが作られるというかたちになっていくのだろうと思います。

それを保障するものが、いまの沿岸漁場の使い方のさまざまなシステムだろうとおもいます。

いわゆる漁業権制度といわれるものは、非常に排他的な制度であるというふうに理解されておる側面があると思います。しかし、私は、必ずしも、そうであるとはおもいません。大きな原則として、産業的な活動を保証するという側面を持つということは確かですけれども、いまの漁業法が制定をされた段階で、敗戦の直後に、漁村にたくさんの仕事のない人たちが、あふれていたときに、作られた「規則」ですから、したがって、狭い漁場ですけれども、漁業で何とか食べていこうという人たちに対して、他を排他的に排除する形の規則を、付随させなければならなかった時代の条件というのがあったとおもいます。

しかし、その後のさまざまなながれ、漁業の後継者が減ってきたり、あるいはレジャーの要望が強まってきたり、現実の漁業法の活用の仕方というのは、非常にフレキシブルに行われ、地域の人たちの、人と人との交流を通じて、さまざまな問題を、解決してきていると思います。

漁業権制度の濃淡のつけた地域にあった海の利用の仕方

今日、私以外のお話をいただいている皆様の事例というものは、そういう意味で、漁業法という一本の法体系にもかかわらず、さまざまなサカナをとる人たち、あるいは、そうではない、地域に住んでいる人たち、それぞれの側からの、海の利用の新しい形というものの方が十分可能なのだということを、示してくれている事例なのだ、とおもいます。

たとえば地域地域によって、漁業権の法律一本ではなくて、それを漁協で具体化する場合の漁業権の行使規則の中に、さまざまな使い方の濃淡を書き入れていく、あるいは、正組合員以外の准組合員のしくみをじょうずに活用しながら、地域の人たちのおおきを、准組合員、あるいは友の会のようなかたちで、組織化して、広く地域の人たち全体が海とのかかわりを持つようにしていく、そうした地域地域の事例というのがたくさんまわっていますし、そうした方向が、これから、ますます必要になってくる、というように思います。

それで、日本の沿岸漁業というのは、ちょっと考えてみてもわかりますように、日本の沿岸域全体に、すきまなく、漁業権がはりめぐらされ、そしてすきまなく、漁協が存在している。先進経済国の中で、こうした国はないわけです。こうしたよい漁場と、よく管理されたシステムと、そして、国民のサカナにたいしての強い消費、需要というものがあいま

て、新しい管理のシステムを、絶えず社会経済の変動に対応しながら作っていくと、いうことは十分可能だし、すでに紹介されている事例というものは、そういうもので、私たちが学ぶべき貴重な事例であろうと、いうように考えております。

○コーディネーター（司会）市村 ありがとうございます。それでは金萬さんよろしくお願いたします。

海で働けど働けど暮らしがよくならない“おかしいなあ”が「里海」の原点

【金萬】（パネラー） 里海という言葉にたどり着く前に、ちょっと簡単に説明させてください。自分が海やっているところは、東京湾アクアラインの木更津というところ。そこで、20年、日の開ける前から日の暮れるまで一生懸命仕事して、夏場はアサリ漁、冬場はノリ養殖をやっております。私が始めた当初は、まだ親が元気だったので、親と一緒にやっておりましたけれど、そのうち親も元気なくして今は一人でやっております。それを20年やって、一番考えたのが、はたらけどはたらけど、本当に生活が楽にならないですね。それじゃあどうしたらいいかと、ちょうど約10年前になりますが、テレビでパソコンというのを知って、衝動買いをして、じゃあ、インターネットでノリでも売ってみようかと、急遽、一週間ぐらい寝ずに、ホームページを作りまして、ノリの販売を始めました。こういうところで、言っていってしまっているのかなア。共販にも出していますからいいとは思いますが、それがきっかけです。10年前から「里海」という言葉としては、意識はしていませんでしたが、これまでの20年間というのは、地先の海しか見ていなかったのです。自分が仕事さえしていればその海

は豊かになる、いくらでもお金になると、思っていたのが、ぜんぜんお金になってこない、何がおかしいのかなあと、こんなにおいしいノリを作っているのに、何で相場が上らないんだろう。ということで、10年前に、インターネットでホームページを立ち上げて、ノリの販売をして、組合にも公認のサイトを作ったので、それではじめました。それで、月百万円ぐらいの売り上げにもなりまして、最初のころは金萬はオタクになったとか、ひとりで儲けやがってとか、いろいろに言われましたが、それじゃあ、いやだと、いうことになって、今度は何をやるかとなったわけです。

アサクサノリ復活計画の取り組みが成功

まず、おいしいノリを作りたいということでした。うちの会が一番有名になったのが、「アサクサノリ復活計画」ということで、それを7年間やりました。当初は、オレが一人で個人でやっていました。何年やってもうまくいなくて、九州の天草行ったり、船橋の天日干のりづくりをしていた近藤さんのところにいって、ヒアリングに行ったり、お年寄りのところにいって聞いたりして、アサクサノリは昔の育て方がいいんだよというので、ここ数年は成功して、今年も、6人のメンバーがやって、3万枚ぐらい生産しました。

それも、うちとしては、自分が食べたい、という気持ちはず先がありました。たんに、おいしいノリを作りたい、食べたいということがまずあったのです。それ以上販売することはあまり考えなかったのですが、一緒に参加をした6名が、こんなにおいしいのだったら販売して出そうよということで、NPO 法人とは別に、アサクサノリ生産をしています。NPO 法人盤州里海の会は、今年で4年目になります。「盤州」(ばんず)という言葉は、木更津の

前に、砂質干潟(さしつひがた)がありまして、盤洲干潟(ばんずひがた)〔地名:「洲」で法人名は「州」〕といいます。おそらく東京湾で最大の干潟です。

ここで、なぜアサクサノリが育たなかったのか、また、どうやったらアサクサノリが取れ、おいしさをわかってもらえるのか、ということで、市民のひとにも呼びかけ、まずは、干潟探検やったり、簀立てのなかでスノーケリングをやったり、海苔すき体験をやったり、それから、海苔づくりをやっていると川というのが非常に重要なので、源流の林業の人との交流を試みよう、まだ一人林業をきちんとやっているかたがおられまして、山をきれいにしている人がいるんですね、中流では、上総掘り(かずさぼり:房総地区の伝統的な井戸の穴掘り技術)をやっているかたもいまして、そのかたがたと連携して、エコツーリズムをやったり、イベントをやったりと、そこに市民のかたに参加してもらって、水とおしてのつながりで、干潟も、皆さんに責任があるんだよと、ぜひうちの活動に参加してほしい、とお願いしています。

NPOをつくるのに役所に10回通いました

うちのNPO 法人は、漁連さんも、組合とも関係なしで作りました。おれ個人が仲間を集めて、10人集まって、県庁にいって、10回通いました。ここの文字がひとつ違ってきます、このあいているところに書きいれてもってきてくださいとか、そのたびに書き直して、10回通いました。こうしてつくったNPO なので、かなり愛着があるのです。その名前の、どこに「里海」という言葉を入れたらよいのかと。うちら漁師は、あんまり重く考えていないで、閉鎖的で、海は自分らのものだと思っています。でも、海に責任感があるのは漁師じゃなくて、流域人口なんですね。うちじゃ、東京湾に住んでい

ますんで。流域人口は、2600万から3000万といわれています。そのひとつがかかわるのが里海だろうと、じぶんたちが排出した水は、東京湾に流れてくるよ、それに責任もってくれるのがその人たちで、漁師と一緒に活動してほしいと、最近言うようになりました。

うちらは、「自然と漁師と市民の共生」といっていますが、それがうまくいけば、豊かな海になってくる。うちらは、きれいな海、とは言わないです。魚がない海で、きれいでは、つまらないので、本当に豊かな海でありたいと。それをつくるのが、うちらは里海だと、単に言葉として使っています。もう、松田先生のような、理論的のようなことはぜんぜん言えないんですね。そういう活動を継続して続けています。

○コーディネーター（司会）市村 金萬さん、ありがとうございます。続いて、足利さんお願いします。

中津にやってきて、「おーすごい干潟」と感動しました

【足利】（パネラー） 先ほど松田先生のほうから、瀬戸内海の話がありましたが、わたしたちのいる、瀬戸内海でも一番すみっこで、関門海峡のちかいところは、まだそんなにひどい汚染というのはすすんでいません。私たちが活動している中津干潟も、生物種を調査したところでは、実に4割が絶滅危惧種というほど、ポテンシャルの高い干潟です。そこでは沿岸漁業もきちんとして行われています。

私は、15年前ぐらいに中津に住むようになりまして、それからの海しか知らないのですけれど、おー、すごい海がある、って思って、カブトガニが、よきによきはあって、すごく感動したんです。

ところが、地元の漁業者やお年寄りに聞くと、いやあ、こんなもんじゃない、昔はもっとすごかったとおっしゃるんですね。

それで、地域のお年寄りに、海の話とか、川の話とか、いろいろな話を聞かせていただいています。そうすると、中津の豊前海、豊前地方では、昔は、浜遠足といって、春になると、バスを仕立てて、小学校の子供たちがみんな海に入って、貝をほったりとか、広い砂浜で、お相撲をしたり、運動会をしたり、それが春の一大レジャーだったそうです。

暮らしに結びついている地域みんなの干潟

それから、家にはガスがなかったので、ご飯を炊くかまどのたきつけに海岸に行って松林の中に入って、枯れ枝をひろって積み上げておくのが子供の仕事だったり、それで、夕方になると、みなさん箆（ざる）をもって海辺に来て、ハマグリやアサリを掘って夕飯のおかずにしったりしました。そして、もう少し砂浜の先のほうをみると、漁師さんが海苔を作っていたり、昭和三十年ぐらい前までは小型の定置網のしかけで、笹干見（ササヒビ）というのがあります。「ヒビ」といいますが、そういう干潟の漁法がありまして、ヒビの一番先の魚がかかる網のなかの魚は、漁業権があって漁師さんのものなのですが、周りのヒビの部分にかかった、お魚とか、カニは、子供たちが持ってかえってもいいということが暗黙の了解になっていました。ですから、子供たちは学校から帰ると、お小遣い稼ぎに、海まで走って行って、それを採って帰るという、こういう暮らしが、昭和40年ぐらいまで成り立っていたということを知りました。

里浜・里海と豊葦原中津国

そうすると、地域の海岸から、海までが、漁業者

も含めて、地域のみんなのコミュニティーの場所で、
すごく暮らしに結びついた身近な場所であったので
す。

それを知って、私たちは、活動の中で、里山と同
じで、これは里浜じゃないかということで、活動の
テーマに「里浜・里海」ということば使っています。
それから河口域に葦原がたくさんあって、万葉集に
「豊葦原の中津国」と呼ばれていたりしていたこと
から、「里海、里浜、豊葦浜、中津国」ということが、
私たちの理想とする海の姿として考えて活動をして
います。

そのなかで、社会がどんどんと便利になって、お
魚や貝はスーパーに行けば売っていて、
ガスで大風呂が自動的にたけて、スイッチひとつで
ご飯も炊ける、そういう生活の中で、海と私たちの
暮らしが、遠くなって、海をおもう心の距離がだん
だん遠くなって、そうこうするうちに、なんとなく、
海は異質な場所で、特別な場所で、漁業は、そうい
う知らないところでしている人たちというようにな
ってしまったような気がします。

ですから、そういう遠くなった心の距離をとりも
どそうというのが、私たちの「里海、里浜」の活動
なのかということで、活動しております。

○コーディネーター（司会）市村 ありがとうございます
でした。では乾さんお願いします。

海を利用しなくなったあとに来る海辺 の荒廃

【乾】（パネラー） 日本の沿岸漁業の生産量は、1
980年代までは、ほぼコンスタントに200万ト
ンとれていました。それで、90年以降、おそらく
坂を転げ落ちるように下がってきています。直近の
統計だと、150万トンぐらいになっています。[生]

とか帆立貝とか非常に増産された種類もあるわけ
ですが、中身を見てみますと、たとえば藻場と関係す
る、アワビとかウニ、あるいは干潟と関係するハマ
グリとかアサリ、あるいは砂場で仮眠するイカナゴ、
こういったものはノキナミ減少しています。

大体1970年当時と直近と比べてみますと25
年間の間に、だいたい四分の一から五分の一に減っ
ています。それが、一方ホタテやサケで増えている
にもかかわらず、全体として減っているのは、やは
り、沿岸域の荒廃というのが、漁業生産に大きく影
響していると考えられます。

私鉄開通がテングサ場をだめにした

荒廃と同時に、それから使わなくなっているとい
うこともあるかもしれません。たとえば、天草。こ
れは、とることが非常に重要なんですね。採らない
と、どんどん植生が遷移していきまして、アラメと
かカジメに代わってしまう。面白い話がありまして、
たとえば伊豆半島の白浜、ここに伊豆急が開発して
線路が通るわけです。伊豆急の開通が白浜のテング
サ場をだめにした、というのは事実でございます。

なぜかといいますと、線路が通ったために、漁師
の家では民宿を始めるんです。したがって、テング
サを採らなくなります。テングサを採らなくなると、
石をひっくり返さなくなります。したがって植生が
遷移してしまっ、まったく変わったものになって
しまった。いまは非常にテングサが少なくなってし
まいました。そういう状況が全国に起こっています。

そのように、利用をしなくなったことが、一方
では、生産の減少につながっていることもあるわけ
です。

それで、昨年久しぶりに、広島県の福山に芦田川
という川があります。30年ぐらい前に調査したこ
とがあります。当時、芦田川の河口は、アサリは掘

ればバケツいっぱいすぐ取れるぐらいで、前面の漁場ではノリ養殖が非常に盛んだった。

ところがいまは、全部ゲートで仕切ってしまっていますから、川の中にはシジミがたくさんいたんですが、全部死んでしまいました。目の前のアサリも全滅です。ですから海と川はまったく断絶してしまっただ。そういう状況が、おそらくいろいろな場所で起こっている。

今日お見えのなかに、三重県桑名市の赤須賀の漁協のかたがおられますが、木曾三川に位置して、ハマグリの特産地を保ってきました。そういう地域は例外的で、そうとう沿岸がおかしくなってしまった。そこを、もう一度見つめなおす必要があるだろう、とおもいます。

自然というのは、まさに、原生的な自然と、人がかかわって維持されてきた自然というものに分けられるとおもいます。

里山と里海はまさに同じような概念です。日本人は縄文時代から、沿岸域を食糧の場としてずっと使ってきました。そして現在も使っているのです。そのことによって形成された人と人間との共生の場が沿岸域だろうとおもうんですね。その活動を通じて生産力も高まるし、生物の多様性も高まっている。ということで、そういう自然と人間の関係、人間のなりわい、このことを、もっと国民に知ってもらう必要があるだろうとおもいます。

里山という言葉が生まれたのは、1980年代でございすが、それは、内山先生がさっき申されましたように、利用がどんどんと減少していく。エネルギー革命で、薪炭はつかわなくなった、キノコは中国から輸入する、落ち葉は農業に使わない、どんどんと利用が落ちていくわけです。

海とひととの関係を「里海」として国民にわかりやすく提案しよう

その結果山が荒れ、また、カタクリとか、キンランとか特殊な生物がどんどんとなくなっていく。そういう流れと同時に、ゴルフ場になったり、宅地になったり、身近な山が大きく変貌していく中で、そういうことではだめなんだと、いうことで、自然と人間の間を、新たに定義する言葉として「里山」という言葉が登場したんだとおもいます。

それと同じような状況が、いま日本の海で、残念ながら起こりつつある。内山さんからは、まだまだ漁業は大丈夫だからといういわれましたけれど、すでに、漁業就業者は20万人切っているわけです。しかも、65歳以上の高齢者は、おそらく5割近くに達しているんじゃないかとおもいます。

林業の就業者は、5万人ぐらいだそうですが、すでに産業としてのていをなしていないわけですが、あるていど集団が必要ですが、数が減れば、管理の質的な転換が起こるとおもいますが、そういうきわめて危機的な状況に今あるんだとおもいます。それを認識なくちゃあいけない。

そのために、やはり「里海」ということばを、わかりやすく定義して、沿岸の再生を、はかるべく、国民に訴えていく、そういうことばとして「里海」があるのだろうとおもいます。

○コーディネーター（司会）市村 ただいま五人のパネラーの方々からそれぞれの活動の中から、おもっているところを話していただいたわけですが、少しパネラーの人同士でやり取りをしていただければとおもいます。松田先生最初に口火を切っていただいて、いま皆さんのお話をきかれて、お感じになったこと、また、ぜひ、金萬さんと足利さん、現場でやっていたらして、どなたかにご質問をしていただければとおもいます。

「生みばなれ」をなんとか食い止めるには

【松田】(パネラー) 実際には、漁民の方が減っているという話をされましたが、もうひとつ、その周りで深刻な話として、いまだんだんと、子供たちをはじめとして、「海ばなれ」ということが非常に深刻になっているのだとおもいます。

というのは、昔は、けっこう育ったところが漁村だったり山村だったり、自然に親しむ機会もあったし、夏は泳ぎにいったり、潮干狩りに行くということもできたわけですが、いまは、大部分が都会の近くで育ちますし、そのそばには埋立地とか、なかなか自然の浜もないということもありますし、やはり、海での活動に、一般の市民や子供たちを、だんだんと巻き込んでいったり、関心を持ってもらうことで、金萬さんや足利さんは非常に大きな役割をされているとおもいます。

それでは、どうやったらうまくいくのか、どうやってもうまくいかないとか、何かご経験がございましたら、お話をしていただけませんか。

お年寄りの経験を話してもらおう

【金萬】(パネラー) ええと、うちの漁場は、けっこう組合員が800人ぐらいいまして、ほとんど高齢者なんです。70過ぎでけっこうヒマにしているお歳よりも多いのです。うちのイベントでも、海苔づくり体験とかをやると、そのお年よりかたが、手伝ってくれるんです。そこに、子供たちが集まって、そこでお年寄りが、これまでの40年から50年の経験を話してくれます。今考えているのも、これを組織化できないか、魅力ある海を子供たちに伝えていただいて、その中から、10年後あんな話を聞いて、海の仕事をやってみたいなあ、という後継者が生まれれば一番いいなあとおもってこう

いうイベント開いています。

○コーディネーター(司会) 市村 じゃあ足利さんお願いします。

【足利】(パネラー) ひとついえるのが、金萬さんとも少し立場が違うのですが、ただの市民団体なのですが、海に行くというのは、漁業権があるということは、10年前に私たちは知らなくて、もう、バケツを持って、ずかずかと海に行ったら、密漁者が大量にやってきたといわれました。あとから漁師さんに。ただ、何も採っていませんよと、いろいろと教えていただいていたんですが、こどもたちにも、ここは漁師さんたちがお仕事をする場所だから、食べられるものは採ってはいけないよ、ということで、みんなが行くようにはしているのですが、そういうなかで、やはり、一般の市民団体が、海や海辺でいろいろな活動をするというのは、とくに漁業体験をするというのは、漁業者の方のご協力がないと、なかなかできない。

そういう意味では、やはり、漁業者の方と仲良くしていくということが大事かなとおもいます。今ちょっと「海ばなれ」というお話がでしたが、先日私が、いろいろなところに環境学習に行くところでは、漁村の地区が入っている小学校があるんです。一学年80人ぐらいで、おじいちゃんやお父さんがまだ漁師さんという子供たちがいるんですが、車庫を始めてむいて食べたという子供が8割くらい、アサリは、お母さんが、実を食べなくていいといったから、汁だけ飲むとか、ワタリガニ、九州の私たちのところではガニなんです。カニどうやってむいて食べるの、と、カニの食べ方がわからないとか、漁村のある地域の子供たちでさえ、乗りはどのようにして四角くなるのかとかまったくわからないというのが現実で、やはり、このままでは地産地消とか、と

いう以前に、子供たちに、食べるものをどこから来るのかを、知らせなければいけないあと、ということを感じます。

○コーディネーター（司会）市村 加瀬さん今のお二人の話を聞いて、特に漁業者と一般の方々とのかわりですか、そういったことについて率直な、ご感想と、お二人にご質問していただけますか。

海という場を通じて渦巻状の輪ができてくる

【加瀬】（パネラー） そうですね。漁業と漁業外のかたとの交流となりますと、かつて、かなり課題にされたものですが、都市漁村交流のいろいろな事業があったわけです。そのときにも、いろいろな交流が進んでいますけれど、ひとつは、漁業者のほうからのボランティアないろいろな活動で、漁業者の人が小学校に行って漁の仕方についての授業をすとか、地域での漁業の変遷についての、自分たちが親から聞いてきた話を伝えるとか、いったような、ボランティア（奉仕・自主的）な活動から、もうすこしまネタリー（商業的）な潮干狩りをやったり遊漁船をやったりというなかで、漁業のことも伝えていくというような、そういった意識的な取り組みもずいぶんあったりして、都会の人たちの理解を得ていくというようなこともあったと思うのです。

わたしなどにとって、特に難しいんじゃないかとおもわれるのは、今、足利さんのほうから話されましたが、漁業者の側が、外からのアプローチに対して、どういう風に対応していくのか、というところでは、まだあだ工夫の余地がたくさんあるようにおもいます。それで、たとえば漁業者の方で、特に壮年期で、子育て世代で、所得を高くしなければいけないというようなひとと、高齢者の方で、聞かれたらゆっくりと説明してくれる、というようなひとと

は、ずいぶん様子は違うとおもうんですが、たとえば、漁業者が、海の環境に対して、非常に敏感だという側面があると同時に、今の状況の中でみると、たとえば、平気で海にタバコを捨てたり、底びき網で上ってきたごみをまた海にもどすと、持ち上げてきたら、ごみを処分するお金がまたかかってくるから、捨ててくるというのが、今では一番合理的な方法であるとおもうんですけども、そういったような、ことであるとか、外の目から第三者的に見たときに、いろいろと感ずることというのがたぶんあるのだとおもいます。

海という、場を通じて、人と人が場を通じて交流しあって、その関係が渦巻状に広まっていくというような世界をイメージしますと、足利さんにお伺いしたいのですが、たとえば環境を重視するひとたちが、外から入ってくる、あるいは話を聞かせてとやってくるというようなことに対する、拒否反応みたいなものが、どういうところから、くずれて、新しい段階に向かっていくのか、といったような点で、何かノウハウのようなものがあればおしえていただければとおもいます。

それから、各地域でおなじような団体のご経験もあろうかとおもいますが、その点でも教えていただければとおもいます。

漁師さんとはコミュニケーションも大事

【足利】（パネラー） まず最初は、コミュニケーションと私たち言っていますが、九州の漁師さんはとても焼酎がお好きですから、まず最初は、飲み会をすとか、私たち、いろいろ地域の会議のようなものをしてきましたが、そこで、漁業者の方ととことん、半分ケンカですが話しをします。ちょっと一年二年、とにかく、時間のある限り、お互いの意見を、分かり合えるまで話をするというのは大切なあ

とおもいます。

もうひとつは、私たちをとってもよく支援していただいている漁師さんがおっしゃったのが、いまタコツボ漁とか、ノリ漁とか色々な体験をさせていただいているんですが、ノリ漁を始めるとき、あんたたちが、子供達に教えてやるというのなら、まずあんたたちが知らなきゃいかんよ、ということで、半年ぐらい、漁師さんに弟子入りして、胴長はいて冬の海にノリ漁を体験しに行きました。漁師さんたちにとって見れば、とてもご迷惑であったらとおもいますが、冬の海に、オバハン二人が胴長はいてついてくるんですからね。そういうのをしていくと、私たちの視点も、いままで理屈で言っていた理論が、海から陸を見てみると、また漁業者の方のおっしゃることもよくわかるようになりましたし、そういうことをけいけんしてみますと、ただ町からわっときて、食べて楽しくしてというかたが多いのですが、もう一步、漁業者のかたの中に入らないと、これからの活動というのはうまくできないのではないかなとおもいます。

○コーディネーター（司会）市村 金萬さん、先ほど伺いますと、金萬さんと足利さんはネットワークをつくって交流もあるということですが、いまの話聞いてお感じになったことをお話ください。

【金萬】（パネラー） 確かに、ノミニュケーションは非常に大切です。漁師というのは、酒を飲まないと心を開かないですね。そこでいいことをいったら、次の日には忘れます。ノミニュケーションにつきあってくれるこんなきれいな女性がいれば、漁師はもういどころですね。

○コーディネーター（司会）市村 ありがとうございます。乾さんは先ほど厳しい話をされましたが、

乾さんが全国歩かれて、逆にいい事例もたくさん知っておられると思いますので、もちろん、よい事例として、金萬さん、足利さんのお二人がここにおられるのですが、そうしたなかから、よい方向にその地域が変わった、というような面をご紹介いただけますか。

藻場やタネ場が地域全体の「里海」を作り出す

【乾】（パネラー） 漁業の本質といいたいでしょうか。まさに、自然の恵みをいただく産業です。内山先生も前に書かれています、工業生産とはまったく違うわけです。工業生産というのは、自然を克服しようということですが、漁業というのは、自然とどうつきあうかということで成り立つ産業ですから、とうぜん、漁業者は自分たちの糧である生物資源を、いろいろな規制によって守ってきました。それと同時にそれを育む、海の環境や生態系というものを、基本的には守ってきたと思います。

特に共同漁業権の中とか、アサリやノリなどをとる特定区画漁業権のような、地先の、せいぜい2～3キロの沖に設けられている漁業権の水域で、えいえいといわれてきたのだと思います。

たとえば、東京湾ですと、干潟が埋め立てられる前の、東京オリンピックの前ぐらいまでは、アサリは、おそらく10万トンぐらい取れていたでしょうね。いま、全国で、アサリは4万トンもいっていないでしょう。それだけ、非常に生産力があつたところですが、本日浦安のかたも見えています。浦安というのは、東京湾の二枚貝の種場なんですね。

ところが、ディズニーランドで全部埋め立てられちゃったわけですが、浦安博物館（非常にいい博物館ですからぜひ行ってみてください）に展示がありますが、浦安から、みんな種が東京湾中に供給され

ていたんです。それで、アサリの種というのは、東京湾全体に分布しているわけではないわけです。タネ場と称する特定の場所にしか発生しないわけです。それを、人が移動させなければ、高密度で、結局育たないことになりますから、昔から漁師は地域間で連携して来ましたから、それを分散して来ました。ですから、東京湾の、二枚貝というのは、水質浄化の能力が高いわけですから、分散することによって、東京湾全体の生産をあげ、勝手をきれいにする役割を、採貝漁業を通じてやっていたんです。

実際いま、三河湾なんかもそうですが、豊川河口に「六畳淵」があります。今埋め立ての問題がそこで起こっていますが、三河湾のいまのタネ場は、全部豊川の河口です。あそこから全部三河湾中に全部まいているのです。それを地先の漁業者がやっているわけです。そういう貴重な場所が埋め立てられようとしているわけです。そういう活動をつうじて、沿岸の環境を守ってきたというふうに思うわけです。

そのほか、藻場では、一番向こう側にあるパンフレットにありますが、青森県の尻屋の例ですが、そこでアワビの貝塚が発見されています。500～600年前のアワビだけの貝塚です。日本でもアワビの貝殻だけの貝塚は非常に珍しいですけど、いまだに営々として、ここでアワビが採れています。集落共有の財産として、一人当たり100万円ぐらいの収入があるんですね。

(注：浜尻屋貝塚：http://www.pref.aomori.lg.jp/culture/kinen_siseki/17.html)

それだけ利用し続けてきても、資源は残っているわけです。あそこは、一時期、函館の北にある駒ヶ岳が噴火して、駒ヶ岳の灰が、津軽海峡をはさんで対岸の尻屋に降りまして、サンドペーパーのようにコンブの藻場をつぶしてしまうんですね。そのあと、地域の人々は必死になって藻場を再生しようと、お

そらく10年以上かけて、最終的にはタテナワ方式という方法にたどり着きまして、いま見事に藻場が再生されています。

そのように、地先の環境を自ら作っていかうことは、日本のいたるところで行われています。

海辺の環境教育は漁の現場の感動からはじまる

○コーディネーター(司会)市村 ひとつ私から質問してみたいことがあります。足利さんがおっしゃっていた子供の教育にたいへんに力を入れておられるということです。子供の教育ということは、漁業の将来の担い手の可能性もあるし、また後継者の問題も抱えているところです。そこで、教育の問題について、一言ずつ、パネラーの皆様からお伺いできればと思います。まず、足利さんの体験の中から、子供の教育と海とのかかわりについてお話しただければと思います。

【足利】(パネラー) 先ほどもお話しましたが、私たちの住んでいるところは小さな町で、人口7万人ぐらいの市ですが、まず、漁業があるということと、自分たちの食べているものは、地先の海で取れているんだということを、いまのひとつの課題としては、子どもたちに知ってもらおうということが活動の中のひとつの柱になっています。

そういう意味でも、体験漁業というのは、とても大事な経験になっていると思います。漁業者の方が、ノリスギ体験をしたり、タコツボを自分でつくって、自分で海に入れて、たこをとろうというタコツボ漁体験をしているのですが、終わってから、必ず地元漁業者の方との交流会をして、とってきたものを、その場で食べながら漁業者のかたと交流をしています。そうすると、漁師の現役を引退したおじいちゃんたちが、皆さん一生懸命お魚の話をしてくれるん

ですね。子供たちはすごく喜んで、船にも当然乗せていただき、漁業の現場を見せてもらいます。そうすると、漁業というのは「ああ、こんな仕事なんだ」ということがわかって感動したり、毎年来てくれる子供さんで、最初の年は、海がナギで静かだったんですが、次の年は波が高く揺れました。すると、その子供は、「漁業ってすごくたいへんな仕事なんだね」といつてくれました。

そういう意味で、地域の中のひとつの産業としての漁業というのを伝えていかないと、後継者をつくるという意味でも、とても大事なことだし、そういうことをする中で、中津も漁業者の方が高齢になっていますので、後継者もほとんどいないんですけれども、この子達の中から、ひょうとっしたら後継者になってくれる子が出てくるかもしれないという思いが、漁業者の方の中にも生まれてきていて、だったら、子供たちにこんなことをしてあげようよ、と云うことを漁業者の方から提案してもらえるようになってきましたので、やはり地域の中で、当たり前のようにやって続けてきた漁業を、たくさんの人に知ってもらうことがとても大事なことはないのかと思います。

○コーディネーター（司会）市村 では加瀬先生、漁業後継者問題をずいぶんご研究されたり、ご提言いただいているんですが、その面からいかがでしょうか。

JF漁協系統上部団体の役割りはいまこそ求められています

【加瀬】（パネラー） どの範囲でお話したらよいか、いろいろな要因があると思いますが、ひとつは、後継者問題そのものではなくて、海の管理の面で、産業としての漁業にいわば与えられている権利といい

ますか、それについて国民に対して、どう説明をして、しかもわかりやすくしていくということは、やはり漁業団体の責任ではないのかなあと思うんですね。これは、漁業者たちが、さまざまな活動をしていく際に、その人たちにわかりやすく説明をしろというのは、コクな話だと思うんですね。仕事で忙しい人たちに、つり座を思っ釣りに来ている人たちに、その人たちには釣りをする権利はあるけれども、たとえば網を持って魚をとることはやってはいけない、とか、というようなことを、もっとわかりやすく説明をすることが必要ですが、その説明をするのは、漁協系統の上部団体の役割であるわけですから、わかりやすく、広く国民に知ってもらう場が必要なのではないでしょうか。そうしないと、お互いに交流しあっていくときに、なんとなく、漁業者側が閉鎖的な壁を作っているようだと、漁業以外の方は考えてしまうし、漁業者の側からすると、規則も知らないで、ずかずか入ってくる人がいるから困るんだと、ということで、考えがまとまってしまうというような側面がありうると思うんです。

ですからそういう意味で、海の管理や利用の仕組みのあり方についての、広い意味では「教育」ということですが、そういう規則を知ってもらうということがあって、お互いが、お互いの考えを知った上で、交流を進める、という前提がひとつあると思います。

もうひとつは、「予防」という場合には、「予防原則」というのは、どうしても、最悪の事態を想定して、次々に予防していくというようになってしまいますから、なにか、既得の、規制する範囲を広げていってしまうという傾向はどうしてもありうると思うんですね。ですから、たとえば、網を引いているところで、ダイビングしてもぐっけてもらったのでは困るから、そこびきをやっているところは一律全部ダイビング禁止にするとか、というようなルー

ルを定めてしまう漁協もありますね。

そこらへんの問題というのは、やはり、社会経済の仕組みの中での柔軟な対応というものが、必要になってくるように思います。それから、そういうことも含めて、情報を積極的に公開していくという姿勢が、漁業者の団体側にあってしかるべきではないか。

それは、実は単協にとってみるとなかなか難しいとおもいますので、

(テープ3おわり)

(テープ3-2始まり)

…… [つながりの部分テープなし] ……正当の保障でもあるわけだし、そのあいだでは、もっともっと情報が公開をされていかないといけないのではないか。そういう納得をお互いにした上で、お互いの権利を認め合って交流していく、という関係が出てくるのではないかなあと考えています。

漁業者への「こうしてほしい」というメッセージも大切です

○コーディネーター (司会) 市村 「里海」という言葉は、現実には毎日漁をしている漁師さんからすると、毎日のなりわいであって、「里海」をそうして守るために、漁師さんはこんなかかわりを持ってきて、こういう役割をになってきたのだということを、漁師さんの側に、理解してほしい、金萬さんの言葉で言うと、「漁師仲間どうして、こういうことをもっとわかってほしいとおもった」というような意味で、実際に働いている漁業者、漁師さんに対するメッセージといたしますか、そのようなことを、お一方ずつお話いただければと思います。最初に、乾さんからお願いします。

【乾】(パネラー) 先ほど申しましたように、自然

に全面的に依存している漁業というのは、自然を大切にしようというインセンティブ(動機付け:目的意識)というのは、当然働いているわけですね。ただ、そのあたりの考えが、海にたずさわっているかたがた全体が、まったく同じかどうかというところ、ちょっと疑問があるところがあります。以前、種子島に行ったときにですね、その定置網の乗り子は、親方は地元の人ですが、全員サーファーなんですね。内地から来た、アイターンのサーファーが、種子島の定置網をになっているんですね。彼らに話を聞いたときに、サーファーというのは、海を大切にするといいです。自分たちのゲレンデ(練習場所:遊び場所)なので、きれいにします。そして、彼らも、三ヶ月にいったんぐらいは海岸のごみ掃除を自主的にやっています。

ところが漁師は、平気で吸殻をぽんぽんと海に放り投げるし、海でなりわいとしている漁師が、何でそうすることをするのか、という疑問をサーファーの乗り子の方々が話していました。もちろん、全部じゃないし、一部だろうと思いますが、そのへんでもう少し、自然に依存する漁業に携わるかたがた、が、模範を国民に対して示すようなことは非常に重要なのではないかと思います。

その点の、レベルが地域によってまちまちですので、一概に、こうだとは言えませんが、やはり、その面で低いところのレベルをもうすこしだけ高めていく、そのことが、「里海」を国民に理解してもらううえで必要な条件だろうと思います。

○コーディネーター (司会) 市村 足利さん、漁師の方々と接して、もう少し、こういう風にやってもらったり、あるいはもう少しこういう行動してもらいたいなあと、そういうものはありませんか。

【足利】(パネラー) けっこう漁業者の方、いまと

でも厳しい立場におられて、せいっぱいのところにおられるので、わたしたちに協力していただいている方がせいっぱいがんばっているかたが多いですね。よくお付き合いしていただいているかたがたは、「もう後継者もおらんし、俺の代で終わりやけん、このまんまでいい」とか、「まあうみもわるくなっしなあ」とおっしゃったりしているんですけども、私はぜひ、ご自分のお仕事に誇りを持ってがんばっていただきたいなど、もっと声を大にして、こんなにがんばっているんだから、中津の魚をもっと食べてくれよ、とお願いいただけると、うれしいんですけど。そんなことを思っています。

「逆さ竹林」で生態系復元に地域が取り組む

○コーディネーター（司会）市村 金萬さん、仲間の漁師の関さんに向かって何か。

【金萬】（パネラー） 実は、非常に難しい問題です。漁業者というのは、収入を上げないと余裕がないんですね。たとえば、環境、環境とみなさんいいますが、うちら、いい海にしようと思ってやっていますが、現状でそんな暇があるかといえば、なくて、昨年ですが、これっていいのかなあ。うちの組合で、東京湾で問題になったカイヤドリウミグモが、大発生し、アサリに寄生して約3ヶ月水揚げがありませんでした。そこで、若いやつは、とりえず、金がなといけないので、海はなれて就職したんです。のこっているのは、60以上の人です。現状はそういうことです。それじゃあ、現在どれぐらいの収入があるかといえば、年間通してでも200万ぐらいしかないんですよ。それで、ぎりぎり切り詰めて生活していて、それで、ガソリンが値が上った、そういう暮らしをしている人に、それじゃあ、環境よくしようといっても、右から左に、流れていだけな

んです。

うちらがいうのは何かといえば、去年、カイヤドリウミグモが何で発生したかといえば、海の生態系が崩れたからだろう、それを捕食する魚が少なかったからだろうと。東京湾に魚が増えれば、カイヤドリウミグモを食べるだろうと、いうことで、乾さんに相談したら、水産大学のほうの先生の「逆さ竹林」（サカサチクリン）というのがあったから、試験的にやってみようというので、それを組合に提案したら、みんな賛成してくれて、そういうことであればぜひやってくれと、うちの仲間も、メンバー以外のものも手伝いたいといってくれました。（「逆さ竹林で生態系回復」プロジェクト：盤洲干潟では、沿岸漁業の要でもあり東京湾の浄化作用に強く貢献しているアサリが「カイヤドリウミグモ」の寄生により大量斃死しています。このウミグモの大繁殖は生態系のバランスが崩れた事が要因と推測されていて、捕食者（ウミグモの天敵）であるハゼ類やその他小魚の減少が要因の一つと考えられています。そこで、ハゼ類や小魚などの避難場、またアサリ稚貝などの沈着促進を目的に、「逆さ竹林」を設置します。「逆さ竹林」は水産大学校、浜野龍夫准教授が発案した「逆さ竹林魚礁」をヒントに、盤洲干潟にあったかたちで設置しています。

<http://kinnori.exblog.jp/>

思った以上にみんな海のことを考えているなあ、これは収入だけじゃないな、という部分はある。ですから、きちんとした目標を誰が定めるかがありますが、まずこれだけの収入が何年後かには、なりますよと、いう目標設定をきっちりしないと、たぶん皆さん動かないです。

自分たちもそうですけれど、自分たちもそこら辺のことを考えながら、酒飲みながらなんですけれど、10年後には何とか400万円ぐらいの収入にはしよう、アサリで無理だったら、ほかのものをやろうと、目標を設定しないとなかなかまとまらない。

その中で、アマモの保全も必要だろうということになり、自分たちノリ漁業者は、アマモは大嫌いなんですけれどでも、アマモがなければ海が正常にならないというのであれば、それも当然必要なものだということで、頭に入れています。

そういう、厳しいながらも前を見据えて考えていく気持ちといますか、きちんと計画ができるような漁協にしていかないと、将来的にこれ以上もうだめかなあと、それが現状です。

また、カイヤドリウミグモに関しては、今年も増えている兆候にあります。ちょっと非常に不安なんです。もう一年漁ができないようなら、うちの組合じゃあもう漁業者いなくなっちゃいます。まあ海苔のほうは何とかやっていますが。以上です。

○コーディネーター（司会）市村 加瀬さん、現実には非常に厳しい状況なんですけど、浜に向かってどうというような考え方を、もう少し取り入れていかなければいけないとか、そういったご提言があれば、お願いします。

若い人に照準を合わせた漁場の使いかたの仕組みを見直すことも重要なポイントでしょう

【加瀬】（パネラー） 長期的に見たばあい、日本の沿岸漁業というのは、私は決して捨てたものではないと思っていますし、先進国の中では、非常に珍しいといますか、底力のある産業としてずっと続いていくと考えています。

その根拠というのは、いい漁場を200海里で、がっちり抱え込んで、まったく自分たちの自由に使うことができる、という島国以外の他国にない特徴を持っている。それから、国民が、鮮魚を輸入魚ではない、生鮮の魚介類を高い値段を出しても買っているということですね。

また、漁協やその他のインフラをはじめとして、社会的制度的なインフラを含めてしっかりした体制がととのっていて、それをフレキシブルに利用することができるという、ことなどの条件の中で、沿岸漁業が実際に存続していくことは十分に可能だと思っています。

それに対する支援策というの、経営安定策が、いろいろな問題を含みつつも、本格的に動き出そうとしています。そのなかで、期待ができる目がありうるなあと考えています。

そういう中で問題なのは、現在それを誰がになうのか、といったばあいに、先ほど足利さんがおっしゃられたことと、まったく重なるのですが、いまの漁協の意思決定というのは、漁業者のたいはんの人、即ち高齢の方の意向を直接民主主義ですから、そのまま反映するということがあるわけです。その高齢になっている漁業者の方々の意向というのは、健康で、自分が望める体力にあった漁業を最後までやっていきたい、という希望だとは思いますが。

それはそれとして、もちろん肯定されるわけですが、だから、自分には後継者もないし、だから新しい投資、新しい計画といったようなものは自分たちには必要ない、となってしまう部分がかかり多いと思います。

そうだとすると、漁業の高齢化がすすんで、だんだんと、投入の密度がさがってきて、したがって、投入密度が下がってきて若い人がはいれば、その若い人が使える漁場が相対的に拡大している中で、若い方々の漁獲金額は、非常に堅実な推移になっているという風に思います。

平均化すれば落ち込んでいますが、相対的に若い人たちがとっている部分は比例的に上っていつている、というのが私の観察なんです。

そういう、若い壮年の漁師さんというのは、皆漁協の理事さんになっているのでもなく、自分の経営

のほうが忙しいというのがありますので、したがって、漁協の意思として現れるのは、主として役員を務めている、あるいは同世代の高齢者の方々ということになってしまう。そうすると、自然な関係で均衡するところで、横ばいになって、あるいはのこっているひとたちの所得は、緩やかに上っていく、あるいは自然経済的な均衡状態が成立をするというようなことになると思います。

それでは、やはりいまの、社会状況を考えてみますと、非常に海の自然を十分に利用して、国民の魚食消費に答えるだけのものを国内的に確保していくということには、遠いことになるのではないのか。もっと意識的に、5年後10年後、いまの組合員の年齢組成から考えて、10年後20年後に、自分のところで、どれだけ漁業者が少なくなっているのかということは、それぞれの漁協単位で計画ができるわけですから、そうだとすると、若い人たちがどれぐらい入ってきてほしい、そのためには、漁場の使い方を、若いひとたち本意に、どのように変えていくか、「予防原則」ではなくて、今の若い人たちに、自分たちが持っている漁業権の相当部分を移していくというようなことが、組み立てられないか、あるいは新しい投資をやって、地域にはないような職業をやっていくことができないか、あるいは、やりたいという人が多かったときに定めた、たとえば、「素潜り」しか許されていなかった地先資源の取得を、より少数の人しかいなくなったのであれば、素潜りからアクアラングもぐりに変えてみる可能性はないのか、など、そうした意識的な制度の組み換えというようなことが必要になってきている、のだと思うんですね。

じっさいに、それぞれの漁協で、独自になされてきていますが、おおくの高齢者の人たちは、そこからの問題提起というものがないと、なかなか、いまの自足的な自分たちの状態、健康で最後まで働きた

いと、そのなかで自足していきたい、というのは、サラリーマンに対して、一番の自営業者の強みでもあるんですけども、その範囲で、終わってしまうと、次の段階に進まなくなってしまうと思います。

今日のテーマである、「里海」ということにかからめれば、重要なのは利用を通じた管理、利用の結果としての管理、ということが、重要であるとすれば、海を大事にしようという言葉だけが残っても、利用というものがなくなってくると、資源としての海洋、人の暮らしを支えるものとしての海洋というものが失われていってしまうのではないかと思います。

じゃあ、誰がやるのかというと、私はこれは系統団体に、強くそうした理念的な問題提起というものを、絶えずやっていただきたいということを期待しております。

○コーディネーター（司会）市村 ありがとうございます。では松田先生お願いします。「里海」を守り再生するために、漁業者、浜に向かってのメッセージをお願いします。

海藻類を地域農業の肥料に使う、物質循環機能をもっと見直そう

【松田】（パネラー） 漁師さん、あるいは水産業が持っている役割のなかで、冒頭の全漁連宮原専務の挨拶にもあったかと思いますが、水産業の多面的機能と、なかなかわかりにくい言葉で言われましたが、その一部、とくに物質循環にかかわる機能についてお話します。ご承知のように、一般の方が、森はただ材木を生産するだけではなく、森が成長している過程では、CO₂を固定させているとか、あるいは水源を養っているとか、さまざまな生物の生息環境を提供しているとか、なんとなく知っているわけです。

ね。水田も単におコメを作るだけではなく、田んぼが小さなダムになっていたり、おたまじゃくしやめだかの生息場になっていたり、そのようなことはかなり市民権を得ているとおもいます。

一方、水産業、あるいは漁師さんが発揮できる多面的機能については、少し議論が遅れたといえますか、必ずしも市民の皆さんが海というものを身近に知っていませんので、知られていないのだと思います。

それで、これは乾さんがご専門とされるところで、たくさん多面的機能があるわけですが、その中で、物質循環、つまり陸から海に入ってきたものを、もう一度とりもどすという、栄養塩の回収機能ともうしますが、そのあたりで、漁業の生産を保っていくことが重要になるということをお願いしたいと思います。

まずお魚をとる前に、日本全国で、一昔前、農業で安い化学肥料がたくさん使われるようになる前は、今藻場がなくなっているという話題がありました。アマモのような海草（ウミクサ）ですとか、ホンダワラのような褐藻類（カッソウルイ）ですとか、地域の農業に対する肥料として、海から藻刈船（モカリブネ）で藻や海草を刈って、肥料に使うものとして海に入ったものを一回取り上げて、それを農業生産に役立てると云う、地域の中で循環が成り立っていたわけです。

簡単に言えば、富栄養化の元になる、リンや窒素が入っている藻や海草をもう一度取り上げるということですから、流入をへらしたのと同じ効果があるわけです。

これがある時期から、こういった面倒なことは手間がかかってたいへんだからとやめて安い化学肥料をたくさん使うようになり、それも海に流れるということで、リンや窒素を取り上げないで、余計に流入されるわけですから、海が富栄養化して、赤潮が

たくさん出るようになってくるのは、ある意味で当然のかたちです。

ところがアマモやホンダワラを刈り取ってこなくても、もちろんカキの養殖やわかめの養殖、あるいは普通の魚をとること自体も、海に何も加えずに、取り上げるわけですから、海から物を回収する働きになっています。この役割りはけっこうバカにできなくて、瀬戸内海でも、水産業が陸から入ってきた窒素やリンをどれぐらい取り上げているかということ計算してみますと（もちろん湾や灘によって異なりますが）、灘によってはそこに流入してきたリンの15パーセントから20パーセントくらいをもう一度取り上げているという計算もあるわけです。

それは、海に窒素やリンを入れるのを減らしたのと同じ効果があります。いわば、資源を維持して、健全な水産業を維持していくということじしんが、環境保全にいいわけですね。

さらに、先ほど干潟や、アサリの話が出ました。かつて、瀬戸内海や東京湾でもそうですが、瀬戸内海では足利さんの周防灘はアサリがたくさん取れましたが、いまほとんど取れなくなりました。普通は、その環境が悪くなったからアサリが取れなくなったと考えがちですが、必ずしもそれだけではなくて、アサリがいるときには、アサリが大量の水をろ過して浄化してくれる。アサリを潮干狩りとか漁業で海から取り上げるということ自身が、海から窒素やリンなどの有機物を取り上げるということです。

そこにアサリやゴカイがいれば鳥が飛んできて、それを食べてくれます。ということでマクロ的な浄化機能が非常に大きいわけです。ところがアサリがいなくなっちゃいますと、アサリが担っていた水質浄化とか有機物を取り上げる機能がなくなってしまう、ますます汚れる。環境が悪くなったから貝が取れなくなっただけではなく、貝という資源がなくなったことじしんが、環境を悪くする、悪循環とい

ますか、ネガティブスパイラルの関係になっている
と書いていただければよいのです。

ですから、やはり、取れなくなったアサリの資源
を復活して、持続的に取れるようにすると、それが、
水を浄化してくれたり、また窒素やリンを取り上げ
ることにもなるという、そういう循環の仕組みを再
構築しなければいけない。そのなかで、水産業ある
いは漁師さんが主役をなしているプレーヤーになっ
ているんだろうと思います。

会場からのご意見

○コーディネーター（司会）市村 ありがとうございます
でした。非常に、日本の沿岸漁業の将来の展望の
話まで広がって、お話いただきました。では、たい
へんお待たせいたしました。ここで、会場のみなさ
まからも参加をしていただき、ご意見、ご質問、あ
るいは日ごろの活動のご発表などもいただければと
思います。どなたからでもけっこうです。お手を上
げていただけませんか。発言の際には、ご所属とお
名前をうかがわせていただければと思います。よろ
しく願いいたします。最初は、発言しにくいとい
うこともあろうと思いますので、本日は全国からお
見えいただいていますので、先ほどお会いしまし
たが、秋田大学の教育文化学部で、ドイツのかた
さうです。ヨハネスさんいかがですか。

「里山」「里海」づくりの難しさ

《意見1》ヨハネス・春美・ウィルヘルム（秋田大
学教育文化学部講師・海洋民俗学研究） ひとつお
伺いしたいことがあります。わたしはもともと資源
管理を民俗学、社会学のほうから研究してきました
が、最近、漁政とか制度のほうよりも、ムラの社会
のほうに目を向けるようになっていきます。そのなか

で、対立的に、海の村があつて、都会があるという
考え方がつよくなっている印象があります。さきほ
どご意見の中で、里山、開発されていく世界の理想
のようなものとして、考え方が作られたというよう
な意見がありましたが、そのなかで、みなさまのな
なかで、たとえばムラ社会そのものに関して、里（サ
ト）といえば、自分の家というようなものをイメー
ジしますが、都会の人にとっては、ムラが、家（う
ち）というわけではないですし、簡単に都会の人が、
ムラの中に行くということではできないようにおも
うのです。たとえば、僕が、最近研究しているのが、
あるムラのお正月行事である歳時の「日にちが変わ
っている」ということに着目して、たとえば、小正
月（1月15日）にやっていたオマツリが、最近
は、マチのほうで仕事をするようになって、三日間
獅子舞をする行事が、一日だけ行うようになって
しまった、そのムラも大きな行政改革で合併され
てしまつて、徐々に地元の人たちのアイデンティ
ティそのものの基盤がなくなっているような気が
します。そのなかで、「里海」とか、「里山」とい
うのが、ここで話しをされていることは、現実
にはたいへん難しいのではないかと、思います。
が、その点どうでしょうか。

○コーディネーター（司会）市村 いまのヨハ
ネスさんのご意見に対してどなたかお答えいた
だけますか。

海をめぐる変わらない生業を維持する関係にこそ着目 しよう

【加瀬】（パネラー） 何が社会の変化ととも
に変わっていくのかというのは、分野によって非
常に違うと思うのです。たとえば、いま言われ
たような、（ムラ社会の中で歳時の内容が
変わっていく）スケ

ジュール的なこと、たとえば成人式が1月15日だったものが、早まって日曜の隣の月曜日になるようになったのは、やはり、ふるさとに帰ってきた人のつとめの予定に合わせるということでしょうし、それから、昔は6月の梅雨の時期に田植えをやっていたものが、五月のゴールデンウィークに田植えをやるような品種改良がなされて来ている、というようなものも農家のたいはんが兼業農家になったということの結果からだと思うのですね。そういう面で非常に大きく変わってくるぶぶんがあることはご指摘のとおりであると思います。

しかし、他方で漁村でもって、港があつて、船があつて、そして魚を採りにいく地域の基本線というものがずっと続いていく、つまり、産業としての漁業が維持できるようにするためと私は考えておりますが、そういう状態があつて、海をめぐる人々が関係を取り結ぶということは、変わらないということではおかしいですが、産業的に海を利用するというひとと、産業以外に海を利用するひとの海を通じた関係、というものは、基本的につながっていく、維持されていく、という風に思います。

ですから、かたちはいろいろと変わってくるかもしれないけれども、今日話題になったような、基本的な関係のあり方、というものについては、私は変わらないと思うし、いまさまざまな交流が行われているあり方というものがかたちを変えながら続いていくのではないかなあと、というふうに理解しております。

○コーディネーター（司会）市村 ヨハネスさんよろしいでしょうか。では、今日は浜のほうから、漁協の組合のかた、青年部の方もたくさんいらしています。特に、三重県の赤須賀漁協さんは、組合長さんほかたくさんいらっしやっただき、専務の水谷さんという方がいらっしやっておりますが、この

方は全国漁青連の元会長さんですが、あとでお話を頂戴したいと思います。ほかに皆さんのほうからご意見ございますか。

お台場で海苔ができるなんてすばらしい

《意見2》中瀬勝義（エコライフコンサルタント・海辺つくり研究会） ちょうど三日前に港区お台場のほうでアサクサノリが大成功して、こちらの金萬さんががんばられてお台場の港陽小学校で、ノリ作り体験学習で、学校の目の前の浜で、びっくりするほど立派に成長しました。アサクサノリは、絶対に無理だといわれていたんですが、そんなことなく、とんでもないことが起ころうとしています。実際に、水もきれいになっていたり、環境、水質面ですばらしくよくなっているのではないのかと思っています。一年間ずっとということではなく、冬のこの時期で、東京湾の最奥ぶのレインボーブリッジのところでおきていることをご報告しておきます。

もうひとつは、私は、今日のシンポジウム聞いていても、少し悲しくなるのですが、昨年「海洋観光立国のすすめ」という本を出しました。ここにおられるかたは、工業があるから日本は大丈夫だと考えておられる方が大部分だと思いますが、あと十年で、中国とインドとかロシアとか、ブラジルが工業化が進んでいきますから、十年後には、GMからTOYOTAに変わるまで100年かかりましたけれど、TOYOTAから中国の会社が変わるのに10年ぐらいだろうと私は考えています。いわゆる大企業型の工業は10年でたぶん衰退しちゃうのではないかと本当に考えておまして、これに比べて、われわれ日本人が食っていくためには、農林水産業が、自給率百パーセントに戻さなければいけない。そのために、みんなが懸命に努力して、水産業であれば、陸上面積では世界で60番目ですが、海洋の面積で

は6番目ということで、このすばらしい海洋を利用した海洋観光立国しかないと僕は考えております。それには、もちろん食べ物を百パーセントにすることと、中国とか、インドのかたを1億人ぐらい日本で2、3ヶ月バカンスを取ってもらって、そうすると高速道路から自転車道路に変わると考えておりますので、ここを2ヶ月かけてゆっくりと楽しんで観光ややってもらって、温泉に入ってもらって、本当に健康になって国に帰ってもらおうと、世界のかたの日本中がバリ島になるしかない、とほんとに考えています。そのくらいの覚悟で水産業を変えて行っていただきたいとおもいます。農林水産業がなくなったら本当のおしまいですから、ぜひ、そういう覚悟でがんばって行っていただきたいともいます。

○コーディネーター（司会）市村 「里海」づくりへの応援メッセージとして伺いました。今日は、宮城県から畠山重篤さんがこられております。畠山さんも、森海川を守る活動をされておりますので、ご意見をいただきたいと思います。

漁師には海とつながった川の水を利用する権利が与えられるべきだ

《意見3》畠山重篤（宮城県カキ養殖業者） 「森は海の恋人」をやっております畠山でございます。漁師が山に木を植え始めまして、ことしで20周年を迎えます。その間いろいろなことがありましたけれども、このようなシンポジウムが開かれるということも、その結果としての現れであろうという受け止め方もできそうです。

私たち漁師がなぜ、森に木を植え始めたかといいますと、沿岸域の海が衰退してきて、海だけを考えていたのではいつまでたっても、漁業はよくなりません。沿岸域の特に、「里海」というのは、日本の場合

は、真ん中に脊梁山脈があって、2級河川まで入ると2万1000本の川が、日本海と太平洋に注いでいるわけです。つまり、日本の沿岸域というのは汽水域ですね、だからプランクトンが沸いて、海藻が生えて、海が豊かだという基本原則があるわけなんです。しかし、当時から、いまでも引きずっているんですが、縦割り行政の壁が、それをずたずたにしておるわけです。

今日は大学の先生もお見えですけど、学者も、海は海、川は川と、山は山と、学問の世界もタコソボに入っちゃって、狭く深くという時代でした。そういうことを研究しているひとが、一人もといひますか、いなかったわですね。それで、やむにやまれずといひますか、科学的根拠はわかっているわけではなかったんですが、漁師が山に木を植えれば、世の中の人は、あいつら何やってんだと、振り返ってくれるんじゃないかと、最初の動機でもあったのですね。

それからいろいろなことがわかってきまして、特に大学の先生方にお聞きしたいのですが、沿岸域の生物生産が、森林の腐葉土を通ってきた栄養塩によってまかなわれるということはわかってき手、理解もされるようになりました。けれども、縦割り行政の中で、昨年農水省の会議に出席しまして、農水省のある方がいっておられましたが、農水省は川のことを考えようと思うと、水利権は全部国土交通省が握っているというわけです。

だから川の水が海にとって重要だと、何とかしてその制度といひますか、仕組みを崩したいとおもっているんだけど、今の制度の中ではこれはできないというわけですね。ですから、法律的にわれわれが持っている漁業権というもの、つまり沿岸域の海で、生物生産から、そういうものを採って、生活する権利として漁業権を考えて見ますと、われわれ漁業者にも、水利権というものがあっていいんじゃない

いか。つまり、プランクトンとか海藻を育ててくれる元は、黒潮とか親潮ではなく、河川水であるということであれば、法律的に、われわれ漁業者にも水利権という権利が、海の生き物にも与えられているんじゃないかという発想が、まず描けないのか、ということです。

それから乾さんにもぜひ伺いたいと思っているのは、最近の新聞で、海藻が、バイオエタノールの原料になる、ということが報道されております。水産庁も6000万円の予算をやっとつけたということですが、実は、私は20年前に、北大の当時の松永先生から、北海道の半分の面積、4万平方キロの海面に海藻をびっしりとはやすと、日本で排せしているCO₂がだいたいそれで、固定化できるという、そういう話を聞いているわけですね。日本の国の周りの水域で、そこに海藻を養殖して、それがバイオエタノールに返信するということになれば、思ったより以上に重要な意味があるのじゃあないか。そういうことの、将来性とか具体性というのはどうなのかということを知りたい。仮に温暖化のことがあって、この話がほんとうだということになれば、その解決策は、う民森を作るしかないのではないのか、ということなんです。ですから、日本の沿岸の海というのは、森林と同じ働きをしている。半年で海藻は生えますから、それが、エタノールに返信するということになれば、国土交通省が、水利権は国土交通省のものだよということは言わせないといいですか、まあ、対立の姿勢で言っているわけではないんです。そういう方向性はあるのではないのか、と思います。

内山先生から、農家が、コメが安くなってどうしようもない、といわれました。本当にそれだけ値段が下がって、気の毒だなと思いますけれども、よく考えてみれば、コメの消費を農水省は増やせ増やせとばかりいっていますけれども、「ご飯のおかずは何

ですか」となぜ考えないんですかね。アサリやシジミが安く、いつでも供給されれば、アサリやシジミの味噌汁作っただけで、ご飯がどれだけ高いか、ということですね。

それから、コンビニでおにぎりが40億個だか60億個売られているそうですが、コンビニのおにぎり、まわりはノリでしょう。中身はみんな海のものじゃないですか。

だから、海のもののおいしくない、何ぼコメがよくたっておにぎりはマズインです。ですから、海と森と川といいですか、川の領域をいったいのものとするなんてことはごく当たり前のことなんですけれども、日本の、タテ割りの制度、法律が、いかに国を滅ぼそうとしているのか、という観点で、大学の先生方に、忌憚ないことを。ご意見をいただければと思います。

○コーディネーター（司会）市村 ありがとうございます。最初に、乾さんのほうに質問があったと思いますけれど。

海藻を育て藻場を増やす効果は絶大

【乾】（パネラー） 海藻からエネルギーをとるのは、すでに1970年ごろに、GEがカリフォルニアの沖合いで、マクロキスティス：ジャイアントケルプを使ってやっていますね。大きな傘を立てて、かさの柄を表面に浮いて、深層水をパイプを通じて取って、傘の柄のところにジャイアントケルプを育てて、それを、メタン発酵させるということで、これは産業的にやりました。オイルショックのあと、値段が下がったので、ペイしなくなったので結局そのプロジェクトは中断したんですね。メタン発酵まで言っていますから、エタノール作るというのは、当然可能なわけです。

それで、二酸化炭素の固定ということで見ると、今、森林が二酸化炭素の固定という機能を果たしているということで、京都議定書でも、森林を何パーセントか増やすことを日本約束しているわけですが、森林は、もう増やす土地がないんですね。ですから、管理をうまくやって、効率的に吸収するようなことをやっていこうとしているのですが、海を見ますと、藻場は最盛期から比べると激減しているわけです。あまり過去のデータないんですが、瀬戸内海ですと、1～2割になっているんでしょうか。減ってしまっているから、森林に比べたら適地はいっぱいあるんですね。

そういう面では、かなり期待できます。また、ブラジルでは、木を切って、サトウキビ畑にしてというおかしなことやっているわけです。木は炭素を固定しているわけですが、その機能を全部失わせて、またバイオエタノールにしてという、まったくバカな話はありません。

海の場合はそういう心配はないわけですね。ただ問題なのは、栄養だと思います。海藻を育てる栄養が、本当にあるのかどうか。おそらく都市近郊であればそうとうに栄養塩がありますし、あと、湧昇流が発生するようなところですね、そういったところではかな r 期待ができます。

こういった観点で、海藻の利用というのはそうとうこれから考えていく必要があるだろうと思います。

「縦割り行政」から「総合的沿岸管理」への期待

○コーディネーター（司会）市村 松田先生、先ほどの畠山さんからのご発言に対して、いかがでしょうか。

【松田】（パネラー） 私も畠山さんのおっしゃることに対してはほとんど同感でございます。実際、

学会までタテ割りになっているというのは、確かに歴史的にはそのとおりですけど、やはり、学会では、海のことを単独の学界的視点では解決できないと、ということで、それなりの努力はしてはいて、具体的に二つほど紹介をしてみます。

ひとつは、沿岸の環境にかかわる学会や協会の八つが束になって、通称「沿環連」という、沿岸環境の連絡協議会を作って、毎年、総合的なテーマについてジョイントシンポジウムをやっています、一歩前進ということです。

私がお世話している瀬戸内海研究会議というのは、単独の学会では海のことでは解決がつかないということで、俗に、分野横断的とか学際的といわれていますけど、文科系から自然科学系まで含めていますので、フォーラムやワークショップでは自然科学的なテーマではなくて、行政とか歴史とか文化とか、島の問題、時には食材とか、そのようなことを議論させていただいていますが、ただ、なかなか行政を含めた生物的なタテ割りの壁というのは、国だけではなくて、県から市町村まで、そうとうに根強いものがありますから、なかなか現実的には厳しいですね。

ひとつつかすかな望みがあると思うのは、昨年できました「海洋基本法」のなかに、総合的沿岸管理と、海の管理は海だけではなくて、陸も含めて、しかも特定の官庁ではなくて、省庁連合系といいますか、そういうことでやりなさいと、方針は書いてあります。ただ基本法はあくまで、基本法で、具体的でないところが特徴なものですから、一種ビジョン的なもので、説明に、海洋基本法に基づく海洋基本計画というものを政府が作るということになっておりまして、来月ぐらいに発表になることになっているんですが、そのなかで、少しずつ前進すればよいと思うんですが、現実的にはなかなか厳しいというような観測もなされていますので、やはり、ここにおら

れるかたのいろいろな立場のグループから、提案とか、アピールとか、いろいろな行動を起こしていかなくてはなかなか解決していかないのではないのか、と思います。

○コーディネーター（司会）市村 畠山さんよろしいでしょうか。先ほど漁業者代表でということで、水谷さんよろしく願いいたします。

「漁師はなあ、飯食う以上の魚や貝は採るなよ、そうすれば、子やひ孫の代まで漁業者は続けられるから」

《意見4》水谷隆行（三重県赤須賀漁協・専務理事）先ほどご紹介いただきました水谷でございます。いっぱいおはなしすることがあるんですけど、しゃべり始めると1時間ぐらいかかると思います。というのも、6年前全国漁青連という組織を預かりまして、そのときに、漁連が嫌いで、水産庁が嫌いで、というのが、当たり前前かが当たり前前ができないようなやりかた、そこに僕はものすごく反発してきた人間です。そんなことがあって、漁連の会議などもほとんどこちらからキャンセルしました。そうしていたなかで、こういうところで発言するのは、1時間ぐらいほしいぐらいです。でも、今日は、僕がこうここにくるようになったのも、ひとつ理由があるんです。今日は組合長と一緒に来たんですが、僕は自由にやらしてもらいました。それで、単協の専務という役をやらしていただいておりますが、ぜひ今日は組合長に、みんなのまえで、一言だけしゃべっていただきたいと、お願いします。

《意見5》秋田？（三重県・赤須賀漁協組合長）先ほどから何度も出てますように、漁師は畳の上で車座になって酒飲まんとな、なんにもはなしできんですわ。ただひとつだけ、いろいろな問題が出てき

ておるとおもいます。高齢化の波も確かに来ておりますけれど、逆に、うちの組合では、多少後継者もおりますけれども、80何歳でまだ元気で、税金払うぐらいの水揚げができればあんまり心配することないんじゃないか、そういうものを、ある意味では眺めてみる、孫やひ孫が、おじいさんから小遣いもらって、おじいさん金持ちやなあ、とおもったら、たぶんなってくれるのかなあ、と思います。その前段にいろいろとありますけれど、基本的に、昔、浜で、浦浜で育ったひとつのポリシー、これが、いま全国で、漁協で失われております。ひとつことだけ言いますが、漁師はなあ、飯食う以上の魚や貝は採るなよ、そうすれば、子やひ孫の代まで漁業者は続けられるからと、この言葉で締めくくります。（拍手）

○コーディネーター（司会）市村 ありがとうございます。三重県の赤須賀漁協で、干潟をアサリやハマグリなどを育てながら、漁業をやっておられる組合でございます。今日は組合長、専務はじめ、5名の方がお見えいただいております。ありがとうございます。ほかにいかがですか。市民の方といっしょに活動をされている田中さんいかがですか。

「総有」の話に感動しました

《意見6》田中克哲（NPO「ふるさと東京を考える実行委員会事務局長」）私自身は、漁村振興コンサルタントのような仕事をやっておりまして、【乾】（パネラー）さんの多面的機能に感動しまして、何とか東京湾で市民も貝や海藻を育てたりすることで少しでも海をよくできないかと活動しております。今日聞いていて、実は、最初の内山さんのお話で、「総有」の話に感動して聞いていたのですが、もうひとつ思ったのは、最近、海から栄養塩を回収す

る事に関しても、なかなか、アオサを採りました、
とつても結局、誰が処理するのか、漁師さんが費用
を出さなければいけない、そういうことで、ことが
ストップしてしまっていることが多いように感じま
す。一方で、下水道法というのがありますが、それ
を見てみますと、最近、高度処理、三次処理のこ
とに関して、下水処理場間でのバーター取引がある
ような仕組みができてきているようなことになって
いるということで、実際に海から栄養塩を取り上げると
いうことを、もっと全体的なところから考えるよう
な、システムができないのかということを最近考え
ております。

○コーディネーター（司会）市村 ありがとうございます
でした。男性ばかりだったんで女性の方にご発言
していただければと思います。

情報のネットワークの必要性を感じます

《意見7》 関いずみ（海とくらし研究所代表） 急
でびっくりしました。今時分がやっている仕事にも
かかわっているんですが、質問といいますかアドバ
イスをいただければと思いますのは、国民の意識を
高めるとか、漁業者間の意識を高めるというのが、
いろいろな話の中で出てくるんですが、いずれにし
ても情報のやり取りをしていかないと、その間が埋
まってこないのではないのかと思うのです。だけ
れども、言葉で言うとすごく簡単なんですが、その
もって行き先はどこにあるのか、たぶん、一般の人
たちは海の情報や、漁業の情報をどこで見ればよい
のか、さっぱりわからないことがあると思うのです
ね。そこら辺をどこでどんな風に、どこで、誰が何
をやっていることですか、あるいはこういう方向
で進ませようとか、アドバイスがあれば教えていた
だければと思います。

○コーディネーター（司会）市村 どうでしょうか、
足利さんから、なにかアドバイスということござ
いますか。

【足利】（パネラー） 私も活動していて、海のこと
は、なかなか情報がなくて、特に九州の隅っこのほ
うにおりますと、情報が入ってこないのが、わたし
も感じておりますが、逆にいいですと、私たちのよ
うなNPOとかNGOとかの市民活動をしているよ
うな、非常にフジャリーなところにいる、お役所でも
ない、当事者の漁業者でもない、そういう私たちの
ようなところを活用していただけるほうが、いいの
かもしれないと思っております。それが、わたした
ち「NPO水辺に遊ぶ会」の行政とか、漁業者の方
とか、市民の方とかをくっつけるガムみたいな、接
着剤みたいなことが、私たちの仕事なのではないの
かと、役目かなと思っております。そういう意味で
は、情報発信を、市民のサイドからできるようにな
るといいと思っているのが自分たちの課題でもある
んです。

○コーディネーター（司会）市村 ほかにございま
すか。今日はお忙しい中、内山先生には最後まで聞
いていただいております、先ほどからうなず
いたり、首をかしげたり聞いていただいております、
皆さんから、拍手で、一言コメントをいただければ
と思いますが。いかがでしょうか。（拍手）

いいなあ、まだ海には「生業」という人の集まる力があるんだもの

《意見8》 内山節（基調講演・哲学者） 私のほう
こそ突然で困ってしまいましたが、まずお話伺って
いて、確かに生みはいろいろな可能性を持っている

なというのが率直な感想です。畠山さんや、乾さんおっしゃったように、単純に資源として見ますと、今までの魚とかの資源ではなくて、いろいろなものが資源として活用できる可能性があるということ、それから、もういっぺん人々を集めていく、ちからになる、という点では、山よりは海のほうが強いなあ、と、足利さんのおはなしをうかがっても強いなあ、と、そう思いました。瀬戸内海の活動を聞いていても、人間をそこに集めていく力みたいなものがある。そこには、生業の人たちが、たいへんなこともあるのでしょうがいるということ。

私半月ほど前に、ある会合で、名前を言ってしまっているのかどうかわかりませんが、トヨタ自動車のまだ入社して2、3年ほどの優秀そうな方でしたが、そのかたが、なにか、2、3日まえに会社に辞表を出したというのですね。何でも、対馬のほうの漁業をやるんだとっていました。結婚しそうな女の人と一緒に、楽しそうにしていました。そういう時代にもまた、片方にはありまして、きちんと発信していくことができれば、実は後継者問題などいろいろな可能性がまだあるような気がしまして、発掘していかなければいけないと思いました。

私は山のほうにいる人間なので、いいなあ、海は、なんてきておりました。

パネラーによるまとめのコメント

○コーディネーター（司会）市村 それでは、このシンポジウムをまとめに入りたいと思いますので最後に、パネラーの皆さんには、これからの国民、また市民の皆さんとの協同（協働）のありかた、あり方というところが難しいのですが、どんなところからはじめていったらいいのか、そういったことについて、一言コメントをいただいでまとめにしていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。それでは松

田さんからお願いします。

大学生の「生み離れ」の意見から学ぶもの

【松田】（パネラー） 今日の議論の中で、「海離れ」といひますか、海への期待、海への関心を持っている人が少なくなっているといひことが出ておりますが、私最近ショックを受けた出来事がございます。実は、非常勤講師で、畠山さんもされておりますが京都大学で、ちょっと難しい講義名がついている、海域陸域統合管理論、ようするに、海も山も川も一緒に管理しないといひけませんよ、という講義を、分担で、オムニバス形式で2回ほどやっています。そのときに出席をチェックするときに、毎回、小さいレポートを書いてもらひます。それで、12月にやった1回目のときに、あなたが具体的に海とかかわった経験を紹介していただきませんか、という課題を出しましたら、その大部分は「私はほとんど海とかかわった経験がありません」という回答がほとんどだったんですね。

それは、京都大学ですから、京都や奈良の出身の人が多ひということもあるんでしょうが、非常に、思っていた以上に深刻だなあと思ひました。やはり、海と触れ合う機会がなかったということですね。私にとって知っている海といひのは、「防波堤だった」とか、そばに「いける海がなかった」とかそういうことがたくさん書いてありました。その次の会合のときに、じゃあ、海に接したり親しんだりするにはどうしたらよひのか、というアイデアを募集しました。そうしたら、たくさん意見がきました。

やはり、もっと小さいときから、公教育といひますか、小学校の中にカリキュラムを組んで、小さいときからやらなければいけない。それから、いったときからそれは面白いかすごひ、と思ひうような、海辺自身に魅力がなければいけないといひのが、全

体の結論なんですね。

そのことはわれわれにとって示唆に富むことなのかなあとしますので紹介いたしました。ありがとうございました。

○コーディネーター（司会）市村 では、加瀬さんお願いします。

経済的利害の大小を超えた漁業の役割りを主張していこう

【加瀬】（パネラー） ちょっとこの会のテーマにはそぐわないかもしれませんが、私が気になっていることをいわせていただきます。

今日のテーマは海をめぐって漁村に住んでいる人たち、そして周りにいる人たちをどう作っていくのか、という話ですが、もう少ししめを、大きく日本の海全体に転じてみると、かならずしも、お互いに理解しあえる場所だけではなくて、やはり漁村は漁村の利害を主張しなければいけないという、側面もあるという感じがいたします。両にらみにしなければいけないのではないかと。

具体的に考えてみますと、海洋基本法の問題です。海洋基本法というのは、第三国との関係、外国との関係という問題もありますが、国内の問題で、海をめぐって、8章の間で分割されている権限を、いわば一元化して調整していく、そういうものとして、海の利用を国益に沿ったものにしていくという、位置づけで作られている法律であると思います。すでに、内閣総理大臣を議長とする、海洋基本会議がつくられておまして、2月にその基本計画が出されるということなんです。

それはもちろんさまざまな、利害を調整するために必要だという側面があると思いますが、仮にそれが、経済的な利害の大きさだけで、判断をされると

いうことであれば、やはり商品経済ですと、経済的な利害が大きいのか、小さいかというのは、図らざるを得ないと思いますので、海の沿岸域を、漁業で使ったほうがいいのか、あるいは公共開発をしたほうがいいのか、あるいは原子力発電所を作ったほうがいいのか、宅地に変えたほうがいいのか、リゾート観光地にしたほうがいいのか、というような関係で、整理が行われていくとしても、やはり、従来の開発をする場合に、漁業権の解消、廃止のさいに必要であった手続きといったようなものが、この海洋基本法の中に吸収されてしまうと云う可能性がなくはないとおもわれますので、目の見える関係として、海をめぐると人と人との交流を強めていくと同時に、眼の見えない、顔の見えない大きな関係の中でも、両面性があるって、いちがいに漁村もお人よししているわけには行かない側面もあるのかなと、今日のいままでの発言とはちょっとトーンは違いますが、一言だけ発言しておくことといたします。

○コーディネーター（司会）市村 では金萬さんお願いいたします。

海を再生し、子供たちに伝えようとする利害を超えた活動

【金萬】（パネラー） ええと、難しくなっちゃったなあ。（笑い） いや、実はうちの会としても、千代田区からの委託事業で、1年に4回、子供たちを受け入れしています。企業からも受け入れてしております。地元の小学生たちとも、ノリの見学会やノリ作り体験をしたりしています。その中で、先ほど、フロアから、中瀬さんから紹介されました、お台場のノリ作りの件ですが、先ほど畠山先生が言われました、縦割り行政のなかで、お台場の海岸にノリ柵をたてて、ノリを育てようという、突拍子もない話

だったんですね。さいしょは、その海は誰が関係してのいうと、東京とであり、国交省の公園管理であったり、そこにうちのような千葉県の漁業者は行くことはできなかつたんですね。その中にNPOのダイバーを含む東京湾で海の再生しようと活動する人たちがいて、そこがかかわって、自分たちも残念ながら、いまだに漁業者ではないんですが、のりの経験のあるNPOとして千葉県から参加しています。あと、東京都漁連も側面から参加しています。みんながあつまってお台場で協議会を設置して、神奈川、千葉、東京のそれぞれことなつた立場のひとが行政のかたもかかわってそこでやっています。その発表会が2月8日に、お台場の臨海公園の港陽小学校で、公開授業があります。もしよかつたら、皆さんも着ていただければどんなことをやっているのか、わかります。ありがとうございました。

○コーディネーター（司会）市村 では足利さんお願いします。

しつこく、たのしく漁師のおじいちゃんの話聞いてまわります

【足利】（パネラー） 今の流れできますと、難しいことをいなければいけないのかなあというおとなんですが、普通のことを一言いいます。ひとつは、先ほどからお話があるように、海だけじゃなく海も川も山もずっとつながっていて、そういう意味では私たちの活動の中でも、沿岸域といいますか、水系全体を土砂とか水質とか、水量とか、きちんと管理をしていくことを、いろいろな壁があるんですが、壁を乗り越えて、行かなければ行けないとおもっています。

ただそのためには地域の人たちのなかで、まず海が好きな人を増やして、海に興味のある人を一人で

もおおくして、地域の声を大きくしていかなければ、その壁は乗り越えられないので、たくさんの人に海を知ってもらって、好きになってもらうことと、それからいろいろな立場の方が、海にも水にもかかわっているの、そういう方たちとみんな、相互理解といいいますか、相手の立場もわかりながら、自分のことも主張しわかってもらうような、相互の理解をしていくことが大切なのだとおもいます。

あとは個人的には、漁師のおじいちゃんに、又こつともやるんかいといわれても、しつこくたのしく、漁業者の方と一緒にいろいろな行事を、長く続けていくことを目標にして、息長い活動を続けていくことが大事なあとと思っています。ありがとうございました。

○コーディネーター（司会）市村 では、乾さんお願いします。

沿岸域は「なりわい」の存在が利用と管理に節目をつける

【乾】（パネラー） 加瀬先生の話とも関連しますが、沿岸域は、漁業という「なりわい」がきちつと存在していることが、沿岸域の環境や資源の管理の上で、きわめて重要なことだと思います。反面教師といえますか、たとえば、一部ですが、漁業権がなくなった海域があるわけですね。東京湾で言えば「横浜みなとみらい」の海域とかがそうですが、このような水域は、資源の管理者が不在ですから、先ほど内山さんも言われていましたが、ゴールデンウィークになると、あつという間に人が集まつてきて、アサリをみんな掘つていっちゃうわけですね。ですから、ゴールデンウィーク過ぎた後は資源はほとんどなくなつてしまふ。幸いあそこは、稚貝がたまるところですから、それなりに毎年生産はされているところ

なんです、そういう状態になってしまいます。それからアオサなんかも大量にたまるわけです。それを、漁業がそこでなりわいとしてある場合には、全部漁業者のみなさんが、かたずけてくれるわけですね。ところが、漁業権が放棄されて、漁業者がいまませんから、市は、その掃除のために年間2000万円ぐらい予算を使ってやっています。

福岡の和白干潟なんかでも、おそらく5000万円はくだらないでしょう。それを恒久的に予算化し使う、投入せざるを得なくなっています。ですからそういう面でも、なりわいがそこに存在していることは、行政コストの大きな削減になっていることを、もっと理解してもらう必要があるのだらうと思います。

これがもう大前提です。そういうなかで、浜を見た場合、生業の担い手の弱体化は否めないわけですね。やはり、一方では国民の海に対する関心も非常に高まってきているわけです。NPOの活動もずいぶんいろいろなところで出てきている。そういうなかで、その方たちを取り込んで、管理の仕組みを再編成していくということが、これから必要になってくるのではないかと思います。

実際にそのようなことがありまして、どういう協力のあり方があるのかといいますと、やはり、日本の沿岸域は、漁業権という法的な枠組みがあるわけです。こういった枠組みの中で、漁業者が中核となって、市民からどういうサポートを得ていくのかということを、これから考えなければいけないと思います。12月に、実は、大型くらの調査で日本海に行き、ひさしぶりに低地の網に乗ったのですが、もう死ぬ思いでした。網を上げなければ、クラゲがたまって、網が破けちゃうんですね。しょうがないので、漁師すごい波でも出かけていかなければいけません。もうほんとうに、われわれはしがみついてもどうしても立ってられないのですが、漁師

の人は、もうその中で平気で作業できるんですね。そういう海に生きる人々にはすごい能力があるんですね。海のことよく知っている。いろいろな生産手段もある。やはり、漁業者が、海においては中核になることが必要だと思うんです。

そういうなかで、市民がどういうことができるのか。たとえば、足利さんの所はすごくいいと思うんですが、干潟の生物をずっと調べておられます。こういう、干潟の生物を地域の人が定期的に長期にモニタリングするということは非常に大切なんです。漁業者は、なかなかこれはできません。そのなかで、知識や、いろいろな人的ネットワークを持っている市民が、そこに参加をするということは、環境をモニタリングするうえで、大きな戦力、サポートになるんであろうと思います。

あるいは、人と人の交流に際しても、漁業者はなかなか苦手です。環境教育とかいろいろな交流活動に対しては、市民やNPOの力を借りるということは、非常に大きな力になると思います。

実は前に、横浜の柴というところで、漁協（横浜市漁協柴支所）が直売をやっていました。あそこは、アナゴとかが多いので、魚をさばかないと、買ってくれないんですね。サバくのに漁協の職員がずっとつきっきりで、面倒くさくて直売をやめてしまった時期があります。ところが、市民が、直売続けてくれ、柴の新鮮な魚を食べたいという陳情が組合にありまして、そうこうしているうちに、職員が一番たいへんであった魚をサバク市民ボランティアの人が現れまし他。自分は、魚をオロスのが好きだという人が3人ぐらい手伝いたいから、直売やってくれという申し入れがあり、結局、しばらく間をおいてから再開したんです。そういう面でも、市民の協力は、おおいに検討していかななくてはいけないんじゃないかなと思います。

もうひとつ、専門的な知識で、ダイバーの人は、

海のノウハウを持っていますので、逆に漁後湯者でも潜れない人もいますから、そういったことでは、藻場の管理とかでは大きな戦力になると思います。そういう面でも協力をつくっていかなくてはいけないのではないのでしょうか。そのように思います。

○コーディネーター（司会）市村 皆さんありがとうございました。では、長時間ありがとうございました。共催最後に内山先生から重要なメッセージをいただきました。それは、海とともに作る協同の世界ということを言われました。これは私たちにとっては、「里海」とともに、皆さんとともに「協同」の世界をつくっていかなくてはならないということで、パネラーの皆様、そして本日お集まりのみなさまのあいだ、少しずつでも、「里海」を通じてのつながりが、できたのではないかと思います。ぜひ皆様がたから、「里海」へのメッセージ、「里海」に対するお考えなども、私ども全漁連にお聞かせいただければと思います。本当に今日は、ありがとうございました。さいごに、パネリストを務めていただきました五人の皆さん、基調講演を押しいただきました内山節さんに拍手でお送りいただきたいと思います。本当に皆様ありがとうございました。それではこれで全体のパネルディスカッションを終了させていただきます。（拍手）

○テープ起こし・原稿・構成 中島 満
●未定稿・講演者・パネリスト・発言者等未確認ため禁転送復写とします。